

【研究ノート】

身体と道具のインターフェイスとして機能する鍛冶屋

齋藤 貴之

1. はじめに

本稿の目的は、ものが身体化し、身体が拡張する過程に着目し、利尻島の漁業と鍛冶屋の関係性をふまえながら漁業者が道具を身体化して自然と対峙するなかで鍛冶屋がどのような機能を果たしているかについて考察することである。

私たちの日常生活はさまざまな道具にあふれている。町を歩けば道具の種類に応じて専門店があり、店に入れば多種多様な道具が所狭しに陳列されている。お目当てのコーナーにたどり着いても昔からある定番の道具、初めて目にする新しい道具、前から気になっていた道具などが目の前に並び、ついつい目移りしてしまう。しかし、そんなものにあふれた日常生活を送っていても相性の良い道具と巡り会うのはなかなか難しい。日常生活の中で用いる道具であれば、相性が悪ければほったらかしにしておくこともでき、あるいははしかたなしに使い続けることで知らず知らずのうちに克服してしまうこともある。ただ、仕事の道具はそうはいかない。仕事の道具は概して高価であり、そんなに何度も買い換えることはできない。また、道具そのものの良し悪しや相性の良し悪しによって生産や収穫、収入が大きく左右されるため、気に入らない道具を我慢して使い続けるといった悠長なことも言うてはられない。たとえば職人は、三田村が「職人の製品作りを支えているのはいうまでもなく技術（職人の腕）であるが、その腕も見合った優れた道具がなければ十分に発揮できない。いわば道具は手の延長なのである」（三田村 2008: 88）と語るように、道具は製作技術と同じくらい重要なものであり、自らの手足と同じくらい不可欠なものなのである。職人に限らず、農業においては農具が、漁業においては漁具が生産や採取の技術と同じくらい重要な役割を担っており、その使い手は自らの手足のように巧みに操る。

近年、人類学をはじめとするさまざまな分野で物質文化に関する研究の再評価がなされ（長谷川 1997, 麻呂・河合 2011）、メディアを身体の拡張ととらえるマクルーハンのメディア論（マクルーハン 1987）やものの身体への拡張を指摘するギブソンのアフォーダンス理論（ギブソン 1985）などへの注目が高まっている。道具とひととの関わり合いに関する重要な論点のひとつに「身体が「もの」を媒介とすることを通じて周囲の環境に積極的に関与するということ、そして、ときに「身体」と外部の「環境」との境界が揺れ動き、変化するというダイナミックな関係性」（麻呂・河合 2011: 11）がある。そして「身体と外部の環境との境界の揺らぎ」に関する事例のひとつとして「道具の身体化」をあげることができる。つまり、ギブソンが「道具は、それを使用しているときには、いわば手の延長であり、ほとんど手の付属品、あるいは使用者自身の身体の一部であって、したがって、もはや使用者の環境の一部ではない。しかし、使用していないときには、道具は単に環境の遊離対象であって、確かに、握れたり、持ち運びできるものではあるが、観察者の外にあるものである」（ギブソン 1985: 43）と語るように、道具は状況に応じて身体と環境の境界を行き来しているのである。

ただ、道具として使用されるありとあらゆるものが身体化するわけではない。道具は実

際に使いこなしていくことによって使用者自身の身体の一部として機能する。ところが、道具を「使いこなす」ということは決して容易なことではない。このことは、私たちの周りを見ると、数回しか使われずに押し入れの片隅などに眠っている道具が数知れずあることから察することができる。宮本が使い続けられるものと見放されるものとの「分岐点は、モノと使い手との相性の良し悪しにある」（宮本 2008:111）と述べているように、手にした道具の良し悪しはもちろん、その道具との相性によってもそれは大きく左右される。たとえオーダーメイドであったとしても、実際に使ってみないとその良し悪しはわからない。何度か使っ

てみては直し、また使ってみては直し、それを繰り返すことによって道具は真に使い手のものになり、使いこなすことができる。ところが、道具の中には使い手の力だけでは直したり、工夫を施したりするのが困難なものもある。つまり、使い手の力だけでは身体化を図ることのできない道具が少なくないということである。その場合、道具を使い手の体型や好み、使用方法などに応じて作り直すという仕事を通して道具の身体化を媒介し、道具と身体をつなぎ合わせる存在、すなわち「インターフェイス (interface)」が必要となる。使い手の力だけではどうしてもならない道具の代表格として鉄製品があり、その身体化においては製作者である鍛冶屋が重要な役割を果たしている可能性が高い。

そこで、本稿では漁業における漁具の身体化に着目し、その過程で鍛冶屋がどのような機能を果たしているのかについて考察検討する。本稿で取り上げる利尻島は、北海道の北の端に位置し、稚内の東の沖に浮かぶ、漁業と観光の島で、島の周囲は約 63 キロメートル、島の中央には標高 1,721 メートルの利尻山がそびえ立っている (図 1)。利尻町の人口は 1950 年代以降減少の一途をたどっており、現在では最盛期の 2 分の 1 以下にまで減少している (図 2)。また、利尻町の漁業組合員数も 1950 年代以降減少し続けており、最盛期には 2,000 人以上いたものが 2006 年には 300 人程度まで落ち込んでいる (図 3)。利尻島の漁業において現在でも主たる地位を維持する磯漁は、一般に「アマ (海士・海女)」と呼ばれる漁撈者によって行われる裸潜水漁ではなく、小船の上から海底の魚貝藻類を見定め、長い「サオ (棹)」の先につけた鉄製の道具等を用いてそれらを採取する「見突き漁」(田邊 2005) である。利尻島では、「イソブネ」と呼ばれる小船にひとりで乗り、「ガラスバコ」や「マルメガネ」をかぶって海中や海底をのぞき見ながら長い「サオ」の先につけた「カギ」や「カマ」、「ネジリ (ネジリシバ)」などでアワビやワカメ、コンブ、ウニなどを採取しており、この漁法は「イソマワリ (磯廻り)」と呼ばれている (図 4)。磯漁ではさまざまな道具を用いて船上からアワビなどの貝類、コンブやテングサ、「ミミコ (銀杏草)」¹などの藻類、タコや磯魚などを採取するため、そこで用いられる道具はそれぞれの採取を支える技

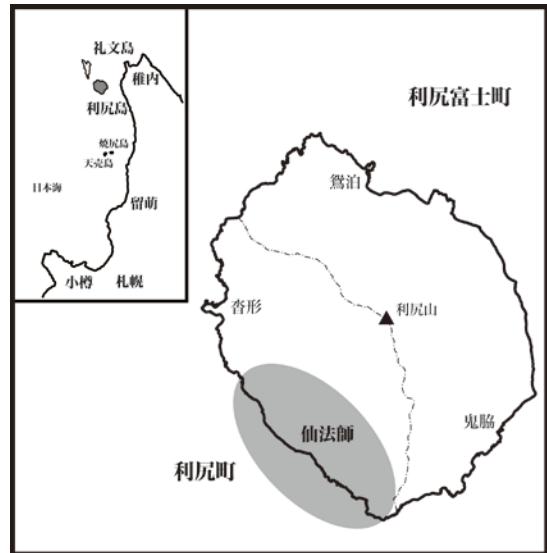


図 1 利尻島と仙法師地区

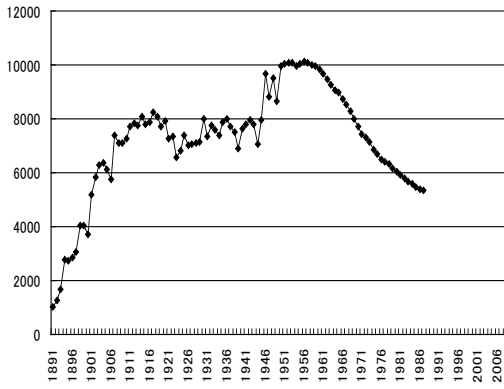


図2 利尻町の人口の推移(人)
(利尻町史編集室 1998 参照)

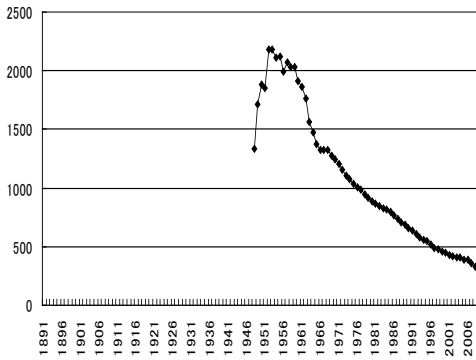


図3 利尻町の漁業協同組合員の推移(人)
(利尻町立博物館作成資料 参照)

術と同じくらい重要な役割を果たしている。そして、それらを生産する役割は「地元の鍛冶屋」によって担われてきた。磯漁にとって、さまざまな注文に応じてくれる「地元の鍛冶屋」はなくてはならない存在であり、鍛冶屋は磯漁に関わるさまざまな道具の生産、開発、改良を通じて磯漁とそれに携わる人びとの暮らしを支えてきたのである。

「鍛冶屋」と一言に言っても、かつてはその製作するものに応じていくつかの種類に分かれていた（例えば、刀剣等を製作する刀鍛冶、包丁等を製作する刃物鍛冶あるいは包丁鍛冶、そして農具や山仕事の道具などを製作する野鍛冶（農鍛冶）など）。しかし、現在の鍛冶屋の仕事は多岐にわたり、農具をはじめ、山仕事の道具、家庭の道具、漁具などを作っており、「頼まれた仕事はたいがい何でもやってきた」と語る鍛冶屋が多く、中には、「製品の数や種類が多いだけに、多くの知識と技術が必要で、刀鍛冶よりもなるのが難しい」と話す鍛冶屋もいるほどである。そこで本稿は、現在も営業を続けているできるだけ多くの鍛冶屋をあつかうために、「鉄を鍛えて農具などの製品を製作する人びと（または業種）」を鍛冶屋と

定義し、この言葉を使うとともに、それらを調査対象とする。

筆者が2008年から2009年にかけて実施した現地調査で確認された利尻島内の鍛冶屋は

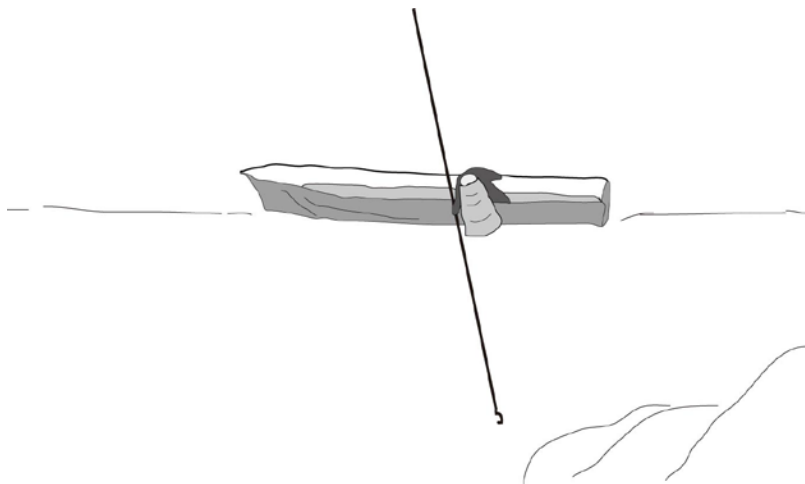


図4 見突き漁

2 軒に過ぎなかった。かつて利尻島には数多くの鍛冶屋が存在していたものと考えられるが、どれだけの鍛冶屋が存在したかを示す資料は乏しく、その詳細は定かではない。ただ、昭和 17 年の『北海道の鍛冶工業組合名簿』²からは当時の利尻島には 6 軒の鍛冶屋が存在していたことがわかるほか、筆者の調査でも最盛期には島内に 11 軒（杓形 3 軒、仙法師 3 軒、駕泊 3 軒、鬼脇 2 軒）の鍛冶屋が存在していたことがわかっている。利尻町の藤井鍛冶は 1 代目で、樺太（現サハリン）の親類のもとで 17 歳の時から弟子入りし、終戦後、現在の場所で開業した。ごく近年までは生産を行っていたが、現在は体調を崩しているためほとんど生産を行っていない。一方、もう 1 軒の鍛冶屋である同町の高松鍛冶は 2 代目で、父親が札幌の鍛冶屋に弟子入りし、その後開業、現業主は父親のもとで修業を積んだ。ホドや機械ハンマーは有するが、父親の引退後は鍛冶製品の生産はほとんど行っていない。

2. 利尻島の漁業とそれを支えた鍛冶屋

漁業は、北海道、とりわけ西海岸の開拓を先導し、今もなお北海道の主要な産業のひとつとして重要な役割を担っている。漁業において不可欠なアンカー、タモ類、船釘などといった漁具を生産してきたのは海岸地域の鍛冶屋であり（北海道開拓記念館 1997:7）、漁具を生産する鍛冶屋はさまざまな工夫や努力によって変化に対応し、その時々に応じて多様な採取道具を供給することで北海道の漁業との密接な関係を維持してきた。漁業、特に磯漁の盛んな利尻島においても鍛冶屋とその製品は重要な役割を担い、島の人びとの暮らしを支えてきたのである。

そこで、以下では、筆者が 2008 年から 2009 年にかけて実施した現地調査に基づいて利尻島の主産業である漁業の展開とその生産物の変遷、利尻島の生産物とその採取道具の変遷について述べるとともに利尻島の漁業と鍛冶屋の関係について検討する。

2-1. 利尻島の漁業とその生産物の変遷

北海道の漁業はニシン漁によって始まった。和人が暮らすようになった明治期から昭和 20 年代前半頃までは利尻島においてもニシン漁が主体であった。ただ、その暮らしは決して安定したものではなく、ニシンが不漁の際に彼らの暮らしを支えていたのは磯漁であった。

磯漁の産物の代表格であるコンブはニシンが不漁の時などにそれを補うものとして重要な役割を担っていた。ある漁師が「ニシンで 1 年暮らせた。ニシンが不漁でもコンブで 1 年暮らせた」と語るように、利尻島はニシンの格好の漁場であるばかりでなく、良質のコンブの産地でもあったことからかつては「宝の島」とも呼ばれていたという。磯漁で採れるコンブ以外の産物も臨時的収入源や自家消費用として島の人びとの生計の主要な部分を立て、その暮らしを支えていた。特に、「ミミコ」やテングサは収入源として小規模漁業者の生活の糧となっていた。他方、当時を知る漁業関係者が「ウニは金にならなかったから潜って採って、食べていた」と語るように、昭和初期までは、「ウニ（ガンゼ、ガンジェ）」（エゾバフンウニ）は専ら家用として消費されるに過ぎなかったようである。

その後、ニシンが利尻島に寄らなくなり、ニシン漁が衰退した昭和 30 年代頃からは磯漁が台頭し、島の人びとの暮らしを支えるようになった。このことは、表 1 に示されるように昭和 39 年度の磯漁漁業権取得者数はのべ 5,501 人に上り、同年度のその他の漁業権取得

表 1 昭和 39 年度漁業権取得者数（利尻漁協仙法師支所）

ミミコ（銀杏草）	23	テングサ	425
ウニ （エゾバフンウニ）	502	アワビ	184
		タコ（磯廻り）	110
コンブ	592	ノリ	75
磯漁漁業権取得者数（のべ）			5501

スケソウ（刺網）	31	ホッケ（底曳網）	23
タコ（樽流）	24	ホッケ（刺網）	37
タコ（漁り曳き）	104	オオナゴ（大女子）	9
カレイ（刺網）	34	ホッケ（底建網）	8
その他の漁業権取得者数（のべ）			270

（利尻町仙法師漁業組合 1964 参照）

表 2 平成 20 年度魚種別漁獲量・漁獲金額漁業生産高（利尻漁協仙法師支所）

ウニ（エゾバフンウニ）	2(t)	43,722(千円)	ホッケ（施網）	202(t)	13,584(千円)
ノナ（キタムラサキウニ）	21	142,507	ホッケ（刺底釣）	—	6
アワビ	1	7,166	オオナゴ（大女子）	71	2,854
コンブ（天然）	77	153,682	イカ（地元船）	1	262
わかめ	9	982	タコ	50	28,613
その他の海藻等	—	—	ナマコ	47	137,481
			その他	9	11,061
磯漁小計	110	348,059	漁船漁小計	380	193,861

コンブ（養殖）	92(t)	169,027(千円)	養殖漁業小計	92	169,027
---------	-------	-------------	--------	----	---------

（利尻町産業建設課 2008 参照）

者数のおよそ 20 倍となっていることから見てとれる。昭和 10 年代に入ると「ウニ」も大きな収入源となるようになり、テングサなどとともにコンブ漁を補う役割を担うようになった。

近年になると磯漁の生産物が極端に縮小し、漁船漁や養殖などの展開により生産物が多様化してきたものの、漁獲生産高に関しては依然として磯漁が主たる地位を保持しており（表 2）、今なお島の人びとの暮らしを支える重要な役割を担っていることがわかる。近年の磯漁の主役はコンブと「ノナ」（キタムラサキウニ）であり、磯漁全体の漁獲金額の 85.1% を占めている（表 2）。昭和初期までは見向きもされず海底を真っ黒く染めていた「ノナ」であったが、近年では重要な収入源としての地位を獲得している。一方、かつて大きな収入源となっていた「ミミコ」やテングサも今では自家消費用に採取されるに過ぎない。コンブは今もなお、利尻島の主要な生産物としての地位を確保しているものの、20 年ほど前から始まったコンブ養殖や中国産の安価なコンブの流通により大きな影響を被っている。

表3 利尻島の生産物と採取道具の変遷 ※ **太字下線**は、鍛冶屋製品。

	生産物	明治～昭和20年代	昭和30年代以降	近年
漁船漁等	ニシン	刺網、建網		
	スケソウ刺網	—	刺網	刺網
	タコ樽流	—	仕掛け（イサリ）	仕掛け（イサリ）
	タコ漁り曳き	—	仕掛け（イサリ）	仕掛け（イサリ）
	カレイ刺網	—	刺網	刺網
	ホッケ底曳網	—	漁網	漁網
	ホッケ刺網	—	刺網	刺網
	オオナゴ（大女子）	—	漁網	漁網
	ホッケ（施網）	—	建網	建網
	ホッケ（刺底釣）	—	—	刺網
	イカ（地元船）	—	—	漁網
ナマコ			金属製ハッシャク	
磯漁	ミミコ（銀杏草）	手・ タモ	タモ	（自家消費用のみ）
	テングサ	テングサトリ	テングサトリ	（自家消費用のみ）
	アワビ	サンボンヤス	カギ アワビ用タモ	アワビ用タモ
	タコ（磯廻り）	サンボンヤス タコカギ	サンボンヤス タコカギ	
	ノリ	手・ゼンマイ	手・ゼンマイ	（自家消費用のみ）
	ウニ（エゾバフンウニ）	手・ タモ	タモ	タモ
	ノナ（キタムラサキウニ）	（自家消費用のみ）	サンボンヤス・タモ	タモ・ハサミ
	コンブ（天然）	ネジリ コンブガマ	ネジリ・ グリグリ コンブガマ	ネジリ コンブガマ
	ワカメ	カマ	カマ	（自家消費用のみ）
	ナマコ	木製ハッシャク	木製ハッシャク	
コンブ（養殖）			親縄	

例えば、「天然根昆布（1等）」の組合買い取り価格は平成17年には10キログラムあたり7万円であったものが、平成21年には14,010円と5分の1にまで落ち込み、コンブ漁で生計を立てることが危うい状況にまで追い込まれつつある。

2-2. 利尻島の生産物と採取道具の変遷

このように利尻島の漁業の主要な生産物が移り変わり、その価値や磯漁の役割が大きく変化したことで用いられる道具にも変化が生じ、多様化していくことになる。

漁船漁では表3に示されるようにニシン漁の衰退にともなう主従の交替という大きな変化はあったものの、開発初期から現在に至るまで採取道具は漁網が主役であり、大きな変化や多様化はみられない。ただ、近年のナマコ漁の隆盛とともに「ハッシャク」と呼ばれ

る金属製の漁具の需要が高まりつつある。「ハッシャク」はもともと磯漁で用いられており、「イソブネ」で海底をひき、ナマコやホタテなどを採取するための木製の道具で今よりもずっと小型のものであった。近年では昔よりはるかに馬力のある漁船でひくため金属製になり、鍛冶屋には製作できないほど巨大化している。

一方、磯漁では、当初から価値や役割の変化の少ないワカメやコンブについては採取道具に関しても大きな変化はみられない。コンブの採取は、一般に、「ネジリ」と呼ばれる先端が二股に分かれた木製の道具を用いて行われるが、「コンブガマ」と呼ばれる海藻採取用のカマや「グリグリ」と呼ばれる螺旋状の鉄製の道具なども用いられてきた。一方、その他の生産物についてはそれぞれの価値や重要度の動きに応じた変化がみられる。「ウニ」はウニ採り用の「タモ（網）」を用いて採取されるが、「ノナ」は価値の高まりとともに「サンボンヤス」で挟み込んで採取されるようになり、その後、主要生産物の一角を担うようになる。「タモ」や「ハサミ」と呼ばれる鉄製の漁具が用いられるようになった。アワビはかつて「サンボンヤス」を用いて突き採っていたが、質が求められるようになると、身が傷つかないように道南から伝わってきたとされる「カギ」が用いられ、現在はアワビ採り用の「タモ」を使用することが多くなっている。また、テングサは「テングサトリ（テングサツキ）」と呼ばれる櫛状の鉄製の道具を用いて採取され、「ミミコ」は輪の部分に刃のついた特殊な「タモ」で採取されてきた。これらは現在でも同様の方法で採取されているが、「ミミコ」やテングサ、ワカメなどのコンブ以外の海草類は需要や商品価値が大きく低下している。自家消費用の海草類の採取に用いる道具に投資する者は少なく、「ミミコ」用のタモやテングサトリ、ワカメ用のカマを新たに購入する漁業者はほとんどいない。そのほか、例えばタコをとるための「カギ」や「サンボンヤス」、磯魚をとるための「タモ」や「ヤス」、ナマコや貝類をとるための木製の「ハッシャク」など磯漁ではさまざまな採取道具が使用されてきた。

以上のように、利尻島の人びとの暮らしを支えてきた磯漁は、多様な鍛冶屋製品を必要とし、さまざまな採取道具の生産、開発、改良する「地元の鍛冶屋」を必要とした。他方で、鍛冶屋はさまざまな工夫や努力によって、磯漁が担う役割の変化やその生産物と採取道具の移り変わりなどに対応し、その時々に応じて多様な採取道具を生産し、供給することで島の磯漁を支えてきたのである。

3. 利尻島の鍛冶屋とインターフェイスとしての機能

先にも述べたとおり、利尻島の磯漁は小船の上から海底の魚貝藻類を見定め、長い「サオ（棹）」の先につけた鉄製の道具等を用いてそれらを採取する「見突き漁」である。小船にひとりで乗り、海中や海底をのぞき見ながら長い「サオ」の先につけた道具で魚海藻類を採取する。「見突き漁」にはさまざまな道具が必要であり、それらはそれぞれの採取を支える技術と同じくらい重要な役割を果たしている。

漁業者にとって道具は、単に海の中の岩場を探ったり、海の中で魚貝藻類を採取、運搬したりするためだけのものではない。そのとき道具は漁業者にとって、視覚障害者の白杖と同様に、文字通り身体の一部となる。例えば、テングサを採取するために用いられる「テングサトリ」と呼ばれる櫛状の道具がある。不安定な船上から長い「サオ」を巧みに操り、その先に付けた「テングサトリ」を用いてテングサを探し、採取し、船上に引き揚げる。

まるで手が伸びたかのように漁業者の意識からは長いサオは消え去り、道具の先で触れたものの感触がダイレクトに伝わっているかのようにそれを使いこなしている。このとき「テングサトリ」は、ギブソン（1985）が語るように、確かに握れたり、持ち運びできたりするが、いわば手の延長となり、ほとんど手の付属品、あるいは使用者自身の身体の一部となって機能しているのである。

磯漁で使用される道具は、実際に何度も使用され、使いこなされることによって漁業者の身体の一部として機能するようになる。ところが、道具を「使いこなす」ということは決して容易なことではない。手にした道具の良し悪しはもちろん、その道具との相性によってもそれは大きく左右される。たとえ鍛冶屋に直接注文して作ってもらった道具であっても実際に使ってみないとその良し悪しはわからない。何度か使ってみては直し、また使ってみては直し、それを繰り返すことによって道具は真に使い手のものになり、使いこなすことができる。ところが、磯漁に用いられる道具の中には使い手の力だけでは直したり、工夫を施したりすることのできないものが多い。例えば、コンブの採取に用いられる「ネジリ」と呼ばれる木製の道具であれば、海の深さや利用する環境、コンブの種類などによって長さ、太さ、傾きを変え、自らの好みに応じた何種類もの「ネジリ」を用意することができ、違和感や不都合があれば漁業者の力だけで調整することができる。また、「サオ」についても用法や体型、好みに応じて長さや太さ、素材などを変え、漁業者自らで作り替えたり、手直ししたりすることができる。しかし、「サオ」の先に取り付ける鉄製の道具等に関しては鍛冶屋の力を借りなければならない。

鍛冶屋の役割は、第一に、道具の製作・供給者としての役割がある。磯漁に用いられる道具の多くは利用者のさまざまな要望に応じて製作、供給される必要があり、鍛冶屋はそうした漁業者の暮らしを左右するような役割を担う。また、道具の改良も重要な役割であり、鍛冶屋は使い手の好みや体格、使用される環境に応じて寄り使いやすいものへと改良し、提供する。例えば、「テングサトリ」の歯の数を何本にすればよいかなどの調整、あるいは「ウニ」を採取する「タモ」の輪の部分の大小の調整などの改良を施すことが求められる。そして、新たな道具を開発することも重要な役割のひとつで、地域の需要や要望、採取物との関わりの変化などを敏感に感じ取り、「こういうものを作ってほしい」という漁業者とともにそれらに応じた新たな道具を作り出す。例えば、細かいコンブを採るのに便利な「グリグリ」やアワビを傷つけずに採るための「タモ」、あるいは近年のナマコの需要の増加にともなう金属製の「ハッシュク」の開発などはその代表的な例と言える。また、新たな道具は他の地域から伝わってくることもあり、「これと同じものを作ってほしい」、「誰々と同じものを作ってほしい」といった要望に応え、見知らぬ道具の生産に取り組み、新たな道具の導入や利用を支援するという役割も担う。アワビを採取するための「カギ」の導入や道南から伝わってきたとされる「ノナ」を捕るための「ハサミ」の導入などがその良い例である。

こうした鍛冶屋による製作や開発は道具の身体化の過程で生じる障害（臓器移植でいうところの拒否反応）をできる限り少なくするためのもの、あるいは障害が生じることなく身体化がなされている既存の道具にできる限り近づけようとするものであり、他方、改良や導入および利用の支援は身体化の過程で生じてしまった障害をできる限り解消しようとするものである。つまり、鍛冶屋は漁業者と道具をつなぎ、漁業者の身体の拡張や道具の

身体化を促す接続媒体としての役割を担っているのである。ただ、磯漁において道具の身体化が生じる際の必須の要素として鍛冶屋の存在や役割があるわけではない。磯漁で使用される道具の中には「ネジリ」などのように漁業者自らの力で製作、開発、改良が可能で鍛冶屋の力を借りなくとも身体化がなされるものもあれば、鉄製の道具であっても「サオ」の調整や取り付け方の工夫、使用方法の変更などにより鍛冶屋を介することなく身体化が実現する場合もある。つまり、鍛冶屋が接続媒体として機能するのは使い手の力だけではどうにもならない場合に限られている。

このように、鍛冶屋は使い手の力だけでは身体化を図ることができない場合に限り、磯漁に関わるさまざまな道具が使いこなされて身体化していく過程に関与し、磯漁で 사용되는採取道具とその使い手である漁業者の「インターフェイス」として機能しているのである。

4. おわりに

遙か昔より人はさまざまなものを得るために自然環境と対峙してきた。そして自らの能力を補うために多彩な道具を用い、道具を媒介、媒体として用いることにより自然環境に積極的に関与してきた。自然条件の変化や対象物の変化などに応じて道具を作りかえ、新たな道具を生み出し、あるいは自らの体系や技術などに合わせて手直しをしてきたのである。本州から北海道に渡ってきた人びともまたそれぞれの地域で培われ、愛用してきた道具を新天地に持ち込み、実際に使用する中で新たな土地のさまざまな条件に合わせて試行錯誤を繰り返してきた。ただ、道具の中には使い手の力だけではどうにもならないものも多い。特に鉄製品はその製作、開発、修理、改良のいずれにおいても鍛冶屋の力を借りなければならぬ。そして北海道の産業を支えてきた多様な道具類、鍬やプラウ、ハローといった農具、鉋やサツテ、トビといった山仕事の道具、アンカーやタモ、カギといった漁具、それらはすべて鍛冶屋がつくりだし、修理、改良してきた製品である。つまり、北海道の鍛冶屋は「インターフェイス」として多様な鉄製品とこの地に暮らす人びとをつなぎ、彼らの身体や能力を拡張させることで北海道という厳しい環境への適応を支えるとともに、その開拓、および農林水産業の発達において重要な役割を担ってきたのである。

すでに多くの鍛冶屋が姿を消し、昔の面影を残すものは少なくなってしまった。しかしそれは、鍛冶屋という姿や伝統ではなく、鍛冶屋という役割、すなわち、「鉄製品を製作、修理することによって人との「インターフェイス」として機能する」という役割を維持することを重要視し、地域の需要の変化に応じて姿を変化させた結果なのかもしれない。現代の鍛冶屋は、例えば重機や農業機械、車輛などの現代の道具とひととの「インターフェイス」として同様の役割を担っている。鍛冶屋が生業である限り、時代に即した変化は不可欠であり、変化し続けなければ生き残れることはできない。今、鍛冶屋は生業として生き残るために伝統を利活用し、新たな変化を受け入れながら地域産業との関係維持を図ろうとしている。今後もそのような生業としての鍛冶屋を研究し続けるならばその伝統や形に固執することなく、姿を変えながらも鍛冶屋という役割を担い続ける人びとを対象とした研究へと移行していかなければならない。

謝辞

最後になりましたが、お忙しい中、調査を快く引き受けていただいた北海道内の鍛冶屋の皆様、調査にご協力いただきました各市町村の教育委員会、郷土資料館、博物館、商工会、商工会議所の皆様、そして本調査・研究にさまざまな面から協力、助言、指導を頂きました利尻町立博物館の西谷榮治氏をはじめとする多くの方々に深く感謝の意を表すとともに、鍛冶屋の皆様におかれましては商売の末永くのご繁盛を心からお祈りいたします。

なお、本稿は平成 20 年度笹川科学研究助成による調査研究の成果、ならびに平成 23 年度学術研究助成基金助成金【若手研究 B】(課題番号 23720416) による調査研究の成果の一部である。

注

- ¹ 「ミミコ」とは一般には銀杏草と呼ばれている海藻で、食用としても利用されるが、当時は主に土蔵などの壁の上塗り、漆喰の材料として利用されていた。この銀杏草を炊いてどろどろのり状にして消石灰などをまぜて使用するという。
- ² 『北海道の鍛冶工業組合名簿』は、恵庭市の明珍鉄工所が所蔵していたものであり、その目的や成り立ちについて一切不明であるが、この名簿からは昭和 17 年当時の北海道(国後島を含む)の鍛冶屋の数や分布の概観を知ることができる。

参考文献

香月節子・香月洋一郎

1986 『むらの鍛冶屋』平凡社

ギブソン, J. J.

1985 『生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る』(古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻訳), サイエンス社 (J. J. Gibson 1979 *The Ecological Approach to Visual Perception*. Houghton Mifflin Company, Boston)

湖中真哉

2011 「身体と環境のインターフェイスとしての家畜—ケニア中部・サンプルの認識世界」『ものの人類学』床呂郁哉・河合香吏編著, 321-341, 京都大学学術出版会

齋藤貴之

2005 「野鍛冶の生存戦略—秋田県における現在の野鍛冶の生存に向けた対応」『文化人類学』70(1): 1-20

2013 『生き残れ! 日本の職人文化—日本の鍛冶屋をフィールドワーク』京都文教大学文化人類学ブックレット 9, 風響社

田邊 悟

2005 「日本磯漁伝統の研究 [IX] —磯領民(見突き漁民)の漁撈伝承研究」『千葉経済論叢』32: 1-36

床呂郁哉・河合香吏

2011 「序章:なぜ「もの」の人類学なのか?」『ものの人類学』床呂郁哉・河合香吏編著, 1-21, 京都大学学術出版会

長谷川博子

1997 「家具／道具と身体—『お産椅子』の歴史から考える」『岩波文化人類学講座・ものの人間世界』内堀基光編, 73-108, 岩波書店。

北海道開拓記念館

1997 『北海道における職人技術』北海道開拓記念館研究報告 15, 北海道開拓記念館。

北海道鍛冶工業組合

1942 『昭和 17 年北海道鍛冶工業組合名簿』北海道鍛冶工業組合

マクルーハン, M.

1987 『メディア論—人間の拡張の諸相』栗原裕・河本伸聖訳, みすず書房 (M. McLuhan 1964 *Understanding Media: The Extensions of Man*. McGraw-Hill, New York)

三田村佳子

2008 「職人という生き方」『物づくりと技』日本の民俗 11, 三田村佳子・宮本八恵子・宇田哲雄編著, 31-106, 吉川弘文館

宮本八恵子

2008 「身体と技」『物づくりと技』日本の民俗 11, 三田村佳子・宮本八恵子・宇田哲雄編著, 107-185,
吉川弘文館

利尻町史編集室

1988 『利尻町史 史料編』利尻町

利尻町仙法師漁業組合

1964 『昭和三十九年度漁業料台帳仙漁組』利尻町仙法師漁業組合

利尻町産業建設課

2008 『平成 20 年漁業生産状況資料』利尻町産業建設課

(さいとう・たかゆき／北海道大学大学院文学研究科)